

言葉の分析より（子どもたちの周りにある言葉）

「言われてイヤだと思った言葉」・・・

「死ぬ」「むかつく」「おまえしゃべるな」「うせろ」「消えろ」「近寄るな」「嫌い」「きもい」「チビ」「うざい」「行動が遅い」「汚い」「ガイジ」「バカ」「あっそー」

今回のアンケートによると、互いに傷つけあう言葉をこんなにも子どもたちは保有し、また頻繁に使い、使われている。これらの言葉を横において、差別発言のみを取り上げて、子どもたちに人権学習が入っていくはずがない。

「言われて元気の出る言葉」・・・

「ありがとう」「だいじょうぶ」「がんばったね」「大好き」「ファイト」「笑顔であいさつされたとき」「悩んでいた時『私親友だから』といわれた時」「どんまい」「ありがとう、助かった」

子どもたちは、人と人との関係を「切る言葉」よりも人と人を「つなぐ言葉」を求めているのです。

差別発言にある課題

差別発言とは、ある特定の集団に属する人たちを侮辱する意味を持っています。最近の差別発言は、実際に対象の人たちに向かって言われるケースより、誰かにダメージを与える言葉として「ばか、あほ」と同じ感覚で使われるケースが多いようです。

現在、多くの学校が差別発言の問題性を受け止め、人権学習を展開しているところです。確かに、差別の問題を切り口にしていくことは重要なことですが、このことだけでは問題の本質的な解決に到達しないのではないかと思います。差別発言をした子どもたちに共通して言えることは・・・低学力や自尊心の弱さ、学級や家庭での居場所の欠如、コミュニケーション力の不足、教師や親との信頼関係不足などを複合的に有しています。このことは、その他「言われてイヤだと思った言葉」を発した子どもにも共通する部分も大きいのではないかと思います。

ですから、「思いやり」だけの人権学習でなく、子どもたち一人一人への丁寧な課題克服につながる人権学習が仕組まれていくこと、そして、そんな人権学習と日常を結びつけることが必要なのです。

また、その日常とは、人との関係であり、人とのかかわりの多くは日常のコミュニケーションに現れます。

日常・・・コミュニケーション

コミュニケーションは自分の言いたいことを言うことだけでは成立しません。「聞くこと」が必要不可欠なのです。「聞かれない」ということは、単に自分の話を聞かれていないだけでなく、話している自分の存在そのものを否定されたこととして認識されます。

「聞かれない」ことが、自分と他者との間に精神的な溝を作り、さらに、自分がこうしたい、こうありたいという願いを隠そうとするなど自分の感情や欲求との間にも溝を作ります。そして、この他者や自分自身との分離や分裂によって生じる「孤立」「ひとりぼっち」という状態が原因のひとつとして引き起こされるのが・・・自尊感情の弱さ、学級や家庭での居場所の欠如であり、それによるコミュニケーション意欲の低下、コミュニケーション力の不足、そして、教師や親との信頼関係の低下、低学力なのではないでしょうか。

では、どのようなコミュニケーションを作っていけばいいのかというと・・・私たちは、実は「生きたコミュニケーション」を交わしたいと望んでいるのです。「生きたコミュニケーション」とはお互いの感情に触れ、欲求に触れることなのです。

少なくともお互いの感情に触れるとき、私たちは「安心感」を体験します。それが、楽しさであれ、さびしさ、悲しさであれ、お互いの感情に触れる時、私たちは安心します。お互いの「感情」に共感できるからです。たとえ、考え方が違っていても、感情は誰でも経験があり誰でも共感できるからです。思いを伝え合う取り組み

そういうことから考えると、「安心感」がコミュニケーションの目標と言えます。「安心感」は私たち人間の活動のベースなのです。安心感が人の心と身体をいやし、安心感が背景にあってはじめて、がんばることや冒険も可能になります。安心感に支えられているがゆえに冒険を試み、失敗しても安心感がショックをやわらげます。だからこそ再挑戦の意欲もわきます。

また、安心感是我们の感覚を敏感にします。警戒心にとらわれている限り、自分に危害を及ぼす対象にだけ感覚が向けられてしまいます。反対に安心感に支えられていると、視野が広がり、興味の対象もそれにつれて広がります。物事に対する興味や関心も、安心感があってこそ深まります。安心感がなければ、一つのことを熟考するゆとりすらももてないでしょう。挑戦、興味関心、自らの進路展望

わたしたちは、深い安心感を求めています。そんな安心感を作るコミュニケーションを子どもと子ども、子どもと大人、教員の間で作っていくこと。そして、そんな安心感のない人権教育では日常と人権学習を結びつけることはますます難しいでしょう。